

---

# Shine Days!

茜雲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Shine Days!

### 【Nコード】

N7786G

### 【作者名】

茜雲

### 【あらすじ】

両親の死、レイプ、妊娠……。心に大きく傷を受ける中学3年のサキと、サキを支えるクラスメイトの和也。そんな2人の物語……。

## 序章（前書き）

多少見苦しい点もあるとおもいますが  
どうかよろしくお願いします。

## 序章

「ただいまー」

誰もいないの？

今日は土曜。両親は家にいるはず。

どうしたんだろ…

なぜか家の電気をつけるのをためらう…

何かおかしい！

直感でそう思った。

ピチャ…

「ひゃあー!!」

何か液体をふんだ。

水？

違う！この臭いは…

血…???

## 第1章 突然の出来事 1話

ん…ここ、どこ？？

ツーンと鼻につく消毒液の臭い。

…病院？？

なんで私ここにいるの…？

えつと…たしか…

親友の奈々と遊んで

プリとつて…家に帰ったんだ。

そしたら誰もいなくて…

水踏んじやって…

…違う！

水じゃなくて、

血？

親は…その中で倒れていて

そしたら…私倒れちゃって…

ああ…私倒れたんだ…

血だ…！！

親は？いまどこに？

大丈夫なの？

まさか…

「また子育てなんて嫌よ！」

「しかたないだろ…俺達以外に誰が面倒みるんだよ…」

私の思考が止まった。

おじさんとおばさんの声だ。

「私は嫌よ!!！」

「じゃあ、どうするんだよ！」

おじさんとおばさんが

私の面倒みしてくれるのかな？？

「…一人で暮らせるでしょ。」

おばさんは前から私のことが嫌いだから、こつこつ答えが返ってくるのも無理はない。

でも…さすがにショックだった。

私のこと、そんなにも嫌いだったんだ…

「一人って…家は？生活費は？」

「…それくらいの面倒は見るわよ。でも…子供1人増えるなんて嫌よ…。」

「…そうだな。金は毎月15万なんてどうだ？」

「別に…私たちにはお金が有り余るほどあるのよ？30万にしてあげたら？あのこが欲しいと言うならもつとあげてもよくないかしら？」

「そうだな…。それで解決するなら。」

おじさん家はすごくお金持ち。でも お金で解決する問題じゃあないよ…。

私、誰からも必要とされてないの??

そう思っている間に

おじさん達はどこかに行ってしまった。

急に静かになった。

すると、おばさんの声で止められた両親のことが再び蘇ってきた…。

親!!

おかあさんは?? おとうさんは??

…あの血の量…

尋常ではない。

もしかしたら…もう、

助からないかもしれない。

なんであの日私も一緒に連れていってくれなかったの…?

私が学校にいる間??

親友の奈々と遊んでいる間??

いつ殺されたの??

あんなに嫌いだった親が今はとても恋しい…。

なんで死んじゃったのよ!!

私一人残して…

会いたい… 会いたいよ!!

……あれ??

な…なんで??

親があんな目にあつたのに…

もしかしたら死んじゃったかもしれないのに…

なんか…悲しくない。

もちろん嬉しくもない。

ただ…無。何も感じない。

いろいろと思うことはあるけど恐ろしいような悲しみには襲われな  
い。

そして、なによりも

涙が…出ない!!!



## 第1章 2話

葬式の日。

知らないおばちゃんやおじちゃん達がたくさん来ていた。そして、みんな泣いていた…。私一人泣いてなかった。

私には全く縁がないと思っていた記者が葬式に来ていた。

親のことは今、テレビで大きく報じられている。犯人もまだつかまっていな。

記者にしたらいい餌になる。

…やっぱり泣けない。なんでだろ？  
もう、生身の親には一緒会えないのに…

葬式は淡々と進んでいった。

そして、葬式はおわった。  
私は記者からの質問責めにあつた。私の耳には、そんな言葉は聞こえなかった。

私は、無の状態だった…。

という訳ではなく、あまりにもショックすぎて心がセーブをかけていた。もちろん私はそんなことは思っていないかった。

そして、次の日から引越しの準備にとりかかった。

元々の家は、警察の迷惑にならないように新しくマンションを借りた。

もちろん私にはそんなお金は無く、おじさんが出してくれた。

私は中高一貫の私立中学に通っていたため、これからも同じ中学に通うことができる。

もちろん授業料も出してくれた。

だから俺達にはもう関わるな。と言われたようだった。

約2週間かかってなんとか家らしくなってきた。まさか…こんなに早く一人暮らしを始めるとは思ってたなかった。

…明日から、学校に行こっかな。

久しぶりに奈々に会いたいかも。さすがにずっと一人だと、人が恋しくなる。

久しぶりに制服を見た気がする。

## 1章 3話

朝、普段とだいたい同じ時間に駅に着いた。

… 奈々は、先に行ったのかな？

「サキー！！久しぶり！」

「奈々??…久しぶり。」

「…もう、来れるの??？」

「…うん。」

… 奈々???

泣いてる。綺麗な涙……。

「よかった…。サキが元に戻って…！！めっちゃ心配したんだよ！！新聞やテレビですつとサキのことが報道されてて…。」

奈々がこんなに私のことを思っていたなんて…。私、そんなに心配かけてたんだ！！

で、こんなにも私は思われていたんだ！！

なんか、あなたは一人じゃないよ…と言われたみたいなきがした。

「…ありがとう。」

「…うん。早くしないと遅刻するよ！！行こ！」

ああ…奈々と親友でよかった。笑顔が戻った気がする。

でもどうやら、そう簡単には元の”サキ”には戻れないのかもしれない。

私には精一杯の笑顔だったのだけど、どうやら私の笑顔はひきつっていらしい。

これは、後で聞いた話なんだけど。

学校でも、ほとんど前と変わらなく過ごした。

どこにでもついてきた記者も諦めたのか少なくなってきた。

やっと1日が終わった。

なんか…疲れたかも……。

今日1日無理してたのかなあ…

まあ、急に学校で疲れただけかもね。

奈々とは別の方面だから

電車は別々。

一人で電車を待っていると、クラスメイトの風間が近付いてきた。風間は男友達。仲はまあいいほうだと思う。

「杉本…。」

「…風間。何???どうしたの?」

「家出しちゃってさあ…泊まるここないんだよね…今日1日泊まらせてほしいんだけど…」

「…え???」

## 1章 4話

「だーかーらー!!泊めてほしい!」  
「……」

…本当は、風間のことが好き。だから…一緒にいたい、、  
それに、人がとても恋しい。

「…いいよ。でも晩御飯はまずいかもよ 笑」  
「え!!!?手づくり?食べれるもの作れよ…!!」

…風間といると、心がおちつく。

「ただいまあ……」  
「おじゃまします……」  
「私しかないんだし、いいよ……」  
「……そっか。」

風間といると、心がおちつく。  
けど、なんかもやもやがとれないような気がする。気分が悪い。自分、どうしたんだろ……。

「…なあ、杉本。」  
「……??何?」

「お前さあ…無理に笑うなよ。俺は、お前の自然な笑顔のほうが好きだ。」

「…普通に笑ってたつもりだったんだけど…。」

「お前、泣いたか??」

「……………え???」

「あんなことがあったのに、普通でいられる訳ないだろ…??無理せずに、自分の気持ちに素直になれよ。」

自分の……………気持ち????

本当は…本当は…

すごく泣きたいほど悲しい。

でも、まわりの人に迷惑かけちゃうんじゃないかって思うと…………。

「あ……………!!風間…………???」

…………抱きしめられてる????

「…………泣きたいときに、泣けよ…………」

ポロツ…………

…………涙???

「あ…………ごめん…………。なんか勝手に、涙が…………。」

「…いいよ。気がすむまで。」

風間の優しさで、私は自分に素直になれた気がする。

「ううっ”…ぐすっ”……」

涙が止まらなかった。

ありがとう。風間…。

## 1章 5話

だいぶん長い間、私は風間の胸の中で泣いた。ずっと、ずっと泣いていた。その間、風間はなにも言わなかった。何も言わずにずっと抱いてくれた。

私には、そんな風間の優しさに心が救われた。

「…ごめんね。」

「…いいよ。これからはさ、俺に頼ってきてよ。俺がちゃんとお前を守るから。」

「え??？」

「…俺、お前のこと好きだわ。本当はさ、こんな時に言わないほうがよかったのかもしれないけど。やっぱり気持ち、抑えきれないわ…。ずっと前から、好きだったさ、もう、俺どうしよ…。」

本当…???!

夢じゃないよ…ね???

「…うん。これからも私を守って…。ずっと、ずっと…。」



「ずっと、守ってやるよ。杉本のこと。」

「ねえ…あのさ、一緒に寝てほしいんだけど……。」

「は???!」

「ずっとさ…親の悪い夢ばっか見るんだよね。お願い!!………怖い  
のよ、私一人生きている、この、罪悪感が……。」

「……いいよ。」

「ありがとう。」

「…なんか、恥ずかしいわ……」  
「そう???私は、嬉しいよ。」

「まあ…俺も嬉しいけどな……。」

「嬉しいんだ 笑」

「……。」

「……。」

「杉本、目、閉じて。」

私の生まれて初めてのキスは、とてもロマンチックな感じだった。とても、…嬉しかった。

この瞬間、私達は一番輝いていたのかもしれない。一番楽しかったのかもしれない。

この後、私達の運命を変える出来事が、あんなにも突然で、あんなにも理不尽に、おこるなんて……私達は思ってもいなかった。

## 2章 晩ご飯 1話

私と風間が付き合っではやくも1週間。

学校では、まだ秘密にしている。私は、あの事件の後なので、いろいとまわりの人から言われるのは嫌いな私のことを考えて、風間が秘密にしてくれたのだ。

家出ぎみで、よく友達の家を転々としてきた風間は、今は私の家で寝泊まりしている。

今日は、風間が久しぶりに家に帰るらしい。

今日は一人分の晩御飯かあ…。

一人分だと、作るのめんどくさいな…。

なんか簡単なものにしようかな…。

「杉本！！ちよつといいか??」しよかな…。

「杉本！！ちよつといいか??」

…担任の木村先生だ。けっこう、友達みたいに親しい。

「なんですかあ??」

「お前、一人暮らししているらしいな。」

「…はい！！毎日大変なんですよ 笑」

「そっかあ。じゃあ、今夜俺と一緒に夕飯食べないか??俺も一人

暮らしていつも食材が余るんだよ…。」

「…でも、先生の家遠いんじゃない？？」

「学校から歩いて20分のところだ。」

今日は…風間はいないし、めんどくさいし…

木村先生なら、いいかな？？」

「わかりました。学校おわったら、家に行きますね。後で地図書いといて下さい。私、先に行って、掃除とかしときますね。先生の料理、楽しみにしてます。」

「……ああ。先、行つといてくれ。」

先生がにやけた気がした。

私は、この時に断っておけばよかったんだ。簡単に人を信用しては、いけないのかもしれない。たとえ親しい先生でも、突然、獣になり、私に牙をむくなんて考えは、私にはなかった。

## 2章 2話

「え…つと、ここを右行つて、まっすぐ……。」

そこには、真新しいそこそこ大きな一軒家があった。

表札には、” 木村 ” と書いてあった。ここが木村先生の家だと思ふ。

「ここかあ……。大きいなあ……。」

ガチャツ

先生から借りた鍵を使って、私は、先生の家に入った。一人暮らしにしたら、かなり整頓されていて、綺麗だった。そして、綺麗な臭いがした。

「おじやまします……。」

「…綺麗すぎ!!! 掃除なくていいかな……。」

暇だったのでテレビを見ていた。

人の豪邸で迷いこんだ少女が、好奇心からいろいろな部屋を見ていく。

1つ、変な扉があり、入ろうとすると、後ろから……………次回に続く。

というドラマだった。

そういえば、ここも他人の家。

ドラマのように、探検してみようかな……………。

バスルーム、キッチン、ベッドルーム、書斎……………  
いろいろな部屋があつた。

「……………ここで最後かあ。」

ガチャ……………ガチャガチャガチャツ……………!

……………鍵????

……………入りたい……………!

ガチャガチャガチャガチャガチャ……………!

開かない……………。

ガチャガチャガチャツ

「杉本。」

「……!!!!せ……先生!!!!?」

「何してんだ??」

「……ま……迷ってて……。」

まさか、この部屋に入ろうと思ってたなんて言えない。  
なんか秘密っぽいし。

「……ご飯にするか。俺、腹減ったわ。」

「……うん。」

## 2章 3話

「先生！！このスープおいしい！！」

「だろ？だてに何年も一人暮らししてないんだぞ。」

「でも、一人暮らし、淋しくない??」

「そりゃ淋しいよ。でも…慣れたかな??」

「そっかあ…。ああ…、」  
「うち  
そうさま。」

「いえいえ。」

「じゃあ…私、もう帰ろっかな??暗くなってきたし。」

「…もう少しゆっくりしてけよ。すぐに帰らなくてもいいじゃあな  
いか。俺が駅まで送るよ。」

「…え。…じゃあ、そうしよっかな。家に帰っても一人だし。」

木村先生だから、少しくらいならいいかな???

それから、二人でずっとテレビを見ていた。



そしたら、いきなり木村先生が私にもたれかかってきた。

…どうしたんだろ???

眠いのかな??

そう思っていると、先生が私の胸を触ってきた。

「ひゃっ…!!?せ…先生??」

「は…はは。お前もこうなること分かってたんかあ??!」

「嫌…。や、やめてよお。」

「嫌がることないじゃあないか。お前は、こうしてほしくて、俺の家に来たんだろ?!」

「違う!!私は…私はただご飯を食べにきただけ!!!」

「……………」

「…いや。嫌あああああ!!!!!」

ばたつかせたが、全然効かなかった。

逆に、私が疲れてぐったりしてしまった。

「はあ…はあ……………」

「ふっ…最初から、おとなしくしとけよ。」

プチ、プチ、プチ……。

ああ…私、ここで私は…???

## 2章 4話

先生が私の胸を本格的に触りだした。

「……………先生……。や、止めてえ……。」

「……………。」

「止めてよお。止めてえ……。いやあ……………。」

次に私の服をすべて脱がせ、いろいろと触り、舐めてきた。

「んあ……………いやあ……………ん。」

「……………へへっ。中3とヤれるなんてな。」

カチカチ、

「ふっ。しかも処女か。いいねえ……………処女とやるなんて高校以来だよ。はあ……………はあ……………」

「……………ッ……………や……………やめ……………」

ズンツ！……！

「いやああああああああ」

「はあ……はあ……。さ、最高だよ。俺もだいたいぶたまってるしな。今日  
は出しきるからなっ！……！」

「うう……っああ……！……痛いっ！……ちよ……ほんとに……痛い  
いいい……！……！」

「はあ……はあ……。ちよ……締めたりすすぎると。や。俺もうい  
くわ……。」

ビクンツッ！……！

おわった……。

これで家に帰れる……！

「何休んでるんだよ。」

え？？？？

「もう一発。やるんだよ。」

ガシッ!!

私の腕をおもいっきり掴み、ベッドにほうり投げた。

そして、その上に乗りがかってきた。

「 ちよっ!!?や...、止めて...嫌ああ...。 」

なんでよ!!!

も...帰りたい...

そして、もう1発...、もう1発...と、私は夜の間に4回く  
らいやられた気がする。

先生は体力をかなり使ったらしく、もう寝てる。

この間に帰れることは出来るけど体が言うことを聞いてくれない。  
...動かない。  
...身体中が痛い...。

なんで私ばかり...。

## 2章 5話

はっ！！！！！

いつのまにか寝ていた。

昨日、かなり疲れたからな……。

ん……と、今日は土曜。

先生は……！！！！？

「……先生？？」

……いない。

なんか、会議とか、残業とかで学校に行ってるのかな？？

今は！！！？今何時！！？

4時………。

もう夕方の4時なの??！

早く……早くこの家出ないと、先生が帰ってきちゃう……！！！！

……身体が動く!!!  
まだ節々が痛いけれど一応歩くことができる……。  
よかった……。早くこの家から出ないと!!!

私は、昨日のことを早く忘れるために、身体を洗った。

大丈夫。私は、昨日何もなかったんだ。

シャワーを浴び、水滴を拭き取り、私は昨日脱がされた服を再び来て、洗面所で身支度をした。  
周りから、昨日のことがばれるようなことはないか、確認した。

大丈夫……。昨日は、ここで寝てしまったんだ。何もなかった。

バタバタバタ!!!

私は、鞆を持ち、急いで玄関にむかった。

これで家に帰れる!!!

この地獄から脱出できるんだ!!!

「はあ……はあ……。」

ガチャツ……

これで自由……………。

「……………!!!!!!」

私がドアノブをまわしたのと同時に、先生もまわしていた。

私がこの家から脱出するのと同時に、先生はこの家に入ろうとしていたのだ。

「どこに行くんだ??サキ……………」



## 2章 6話

………嘘！！！！？

もう帰ってきたの！！？

「………先生……。」

「………どうして逃げるんだい？？もう俺ら、身体を交えた仲じゃないか。な？？？」

ゾワッ……

……嫌………先生が怖い。

………男の人が怖い！！！！

「………や、やめ……。」

「ん？？なんだって？？………なんで、俺から逃げるんだい……？？」

ドクンッ……！！

私は先生におもいつきり押されてしまった。

「いやあっ!!」

ガシッ!

「さあ……こつちだ。」

また……ベッドに連れていかれる。

「いや……、先生、痛い……。放してえ……。」

「じゃあ、一人で歩けば……??」

「……わかった、わかったからあ。放してよ。」

私は、ベッドルームに向かった。

「違う。そつちじゃない!!」

ガシッ……

痛っ……!!

ズズズ……ズズ……

「ちよっ……や……ああ…………」

「……?」

「……鍵がかかっていて  
入れなかった部屋……。」

「……何、する部屋なの?」

「……ここかい?……入ってみればわかるだろ……!」

「ドクッ……!」

「いやあ……!」

「ガシャン……!」

「……鍵?… 鍵かけられたんだ……!」

「私、ここから出れないの……?」

「出してえ……! いやああああ……!」

「風間……!」

「もしかして、私の家でずっと待っていてくれる?」

でも私、もう風間に会えないよ……。私、汚れちゃったもん。

## 2章 7話

風間は、今どうしてるんだろ。

私は今でも風間のことが大好き………だけど、私はもう風間に触れない。風間とも付き合っていけない。だって………だって私、汚れちゃったよ…。

たとえば、相手が知っている人であっても、レイプはレイプ。

無理矢理ヤられたという事実は変わらない。

そして、そのことを私はずっとずっと引きずるだろう。

そして、信頼していた先生に裏切られ、レイプされた、ということに私は悩まされる。

たぶんそれは、これからもずっと………。

風間！！！ 助けてよ………。

ガチャッ………

「ご飯だ。」

「…………先生え…。」

「…………早く食べるよ。」

ガチャッ

…………この鍵さえどうにかなれば、私はここから出れるかな???  
自由になるかな…………???

ガチャガチャガチャガチャガチャガチャ!!!

開いて!!開いてよ!!

「サキ!!!!!!」

ビクッ!!

「…………先生…。」

「静かにしないと、鎖を付けるよ。」

「…………ごめんなさい。」

……とりあえず、ご飯食べないと。  
これは、晩ご飯かな??

……おいしい。あの晩ご飯と同じ味がする。

なんでこんなことになったんだろ……。  
私がおもいつきり嫌と言わなかったから??  
……私がすぐに帰らなかったから??  
……私が晩ご飯食べに行つたから??!

もう……嫌だ……。  
帰りたい……。帰りたいよお……。

ガチャッ

「……さあ、楽しい時間の始まりだよ。」

## 2章 8話

「…………え??」

「さあ…昨日みたいに俺を楽しませてくれ。」

クチュ…………

「ん…………!!!」

キス!!!?

…嫌…………気持ち悪い!!!

「やめてえ!!!」

ドンッ!!

先生はよろめいてしりもちをついた。  
私は、それで先生がひるむと思った。

だが私の思いとは逆に、先生はさらに興奮してしまった。

「ははは…………。やっぱり少しは嫌がって、抵抗してくれないとおも  
しろくないな…………。」



ガシッ!!

私の両手を、先生は片手でおさえつけた。

「んあ……や、やめてえー!!」

「叫べ叫べ!!もつと泣きわめけ!!」

もう嫌だ!!

「ああ……あああああ」

なんでよ……なんで私がこんな目にあわないといけないのよ!!!!

「もつ……やめて……え!!!!」

「何言ってるんだ……。この部屋はお前のためにつくった部屋なんぞぞ。」

「……………え???」

「この部屋は、お前をいつか監禁できる日が来ることを願ってたんだ。」

「な……………何言ってるのよ!!!!」

「お前が中1の時から、お前のことは気に入ってたんだよ。で、この部屋作っただ。」

「何……それ……？！……気持ち悪い……。やめてよ……！……近寄らないで……！」

「あまりさわぐと、鎖でつなぐぞ……？」

……ダメだ。

先生に抵抗できない。

「……………」

「やっぱりそのほうがやりやすいよ。」

……………すぐおわる。すぐおわるから……。

大丈夫。1回くらい。

もう、風間とはいられない。

そう、強く思った。

## 2章 9話

「 やっぱお前は、最高だよ。」

「……………」

「 また、明日も……………」

もう嫌……………」

「……………」いつ帰してくれるの??」

「 ふっ……………」さあな。」

「 帰してよ……………」帰してよお……………」

「 おとなしく待っておけよ。」

ガチャッ……………」

明日には……………」帰りたい!!」

こんな毎日、もう嫌!!

.....寝てた!!

「ん...朝??」

時間はわからないけど  
朝から昼までの間だと思う。

時計も、窓も、何も無い部屋。  
何の楽しみも味わうことのできない部屋。

こんな退屈な空間に2、3日は監禁されてた私。

.....鍵さえ開いていけば!!  
鍵さえ開いていけばここから出れるのに!!

なんで鍵がしまってるのよ!!

ガチャ！！！！

八つ当たりで何回かドアノブを回そうと思ったその時！！

ドアが開いた！！

「え??？」

先生が閉め忘れてたんだ！！

この間に帰らないと！！

私は、前と同じように、  
シャワーを浴び、身嗜みをすべて整えてから

家を出た！！

何日ぶりの太陽だろ???

すごく……開放感が！！

私は前の時、  
扉1枚前に先生がいたことを思いだした。

とにかく、駅に向かおう!!

そして、私の家に!!

私は、無我夢中で走った。

先生に追い掛けられてそう  
で止まるのが怖かった。

私は駅に着いて、電車に乗った。

男の人が怖い!!

今まで先生しか見てなかったから  
先生のことが怖いんだと思っていたが、  
私は、男の人自体が信じれ  
ず、怖くなった。

やばい!!!

私、電車が怖い!!

男の人が怖い!!!

## 2章 10話

「はあ……はあ……。」

やっと自分の家に着いた。

自分の家に着いたことで安心し、私はリビングのソファで寝てしまった。

ああ、私はこれで開放されたんだ。

46

……開放??

何言ってるんだ。俺は、どこまでも追い掛けるぞ。たとえ風間がいようとも。

……風間?? 風間とのことなんで知ってるのよ!!! でも、もう風間とは別れるのよ!!!

あんたのせいで!!!

あんなのせいで私は汚れたのよ!!!

そうか……なら、もっと汚してやるつか???

な…何言ってるのよ!!!

もっと汚してやる!!

「 いやあああああ!!!!!!」

「 杉本!!!!」

「 はあ……はあ……。え???」

「 大丈夫か??だいぶんうなされてたけど…」

「 え……ベット???」

「 …お粥、作ったから待ってて。」



私が寝てる間に

風間が運んでくれたのかな？？

汗で私の服は濡れていた。

「持ってきたよ。」

「……………ありがと。」

「元気、無いね。」

風間が心配して、

何気なく私の肩をかかえた。

「……………！！！！！！！！！！」

ぞわっ！

今いるのは風間なんだって頭ではわかっているけど、どこかで先生のことを思い出す。

「嫌あ！！！！やめてえ！！！！」

「杉本！！！！？」

「はあ……………はあ……………、ごめん。」

「杉本。この週末、どこにいた?? 友達の家??」

「!!!!!!……え……ち、違……。」

「俺には言えない??」

「言えないよお!!!! 風間には言えない……。嫌われたくないんだもん!!!! もつと風間といたいんだもん!!!!」

「……嫌わない。俺は大丈夫だ。」

「ほんと???」

## 2章 11話

「うん。ほんと。」

そう言っつて私を優しく抱きしめてくれた。

「この週末ね、木村先生の家にしたの。」

「先生??!なんで??」

「……………言えないよ。やっぱり、無理。……………ごめん。別れよ??? もう無理だよ。」

「何がだよ。何が無理なんだよ。俺は杉本がいいんだ。杉本じゃあなきゃ駄目なんだ。」

「わかった。」

私は、風間に嫌われるのを覚悟し、話した。

晩ご飯のこと。

急にやられたこと。

起きたらもう夕方だったこと。

家から出たら先生がいたこと。

監禁されたこと。  
鍵が開いてたこと。

すべてを話した。

風間は最後までだまって聞いてくれた。  
私は、風間に引かれたんだ、と思った。

「……………ね??無理でしょ??だから、優しくしないで。私を優しく抱きしめないでよ……………」。

私は風間の腕をおろし、風間の顔を見た。

「……………風間??」

……………泣いてる。

「ごめん。俺、お前のこと守るとか言ってる……………ほんとごめん。守れなかった。お前を傷つけてしまった。ごめん!!俺のせいで!!」

「なんで謝るのよお!!私が悪いんだよ??私が家に気軽に入らなかつたらよかつたんだよ??」

「ううん。俺が悪いよ。守れなくてごめんな?ほんとにごめん。」

「うづ……ぐすっ、ぐめんー！……あああああ……！」

「今度からはちゃんとお前を守るよ。」

「お前が全部をしゃべってくれてよかったよ。」

「すっきりした。全部受け止めてくれて、ありがとう。」

「受け止めるものにも、杉本は悪くないだろ??」

「……うん……！」

「じゃあ……あれは、取り消しだよな??」

「……あれ??あれって何??」

「別れるって話だよ。」

「……風間は汚れた私でもいいの?」

「杉本は汚れてないよ。綺麗だよ。」

「ありがとう……！」

「杉本……。」

「ん？？」

チュツ！！

私はこの時すごく幸せだった。

この時は……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7786g/>

---

Shine Days!

2010年11月24日15時49分発行